

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530817

研究課題名(和文) 学校音楽教育における潜在的カリキュラムに関する研究 学校音楽文化の日韓比較研究

研究課題名(英文) What is Hidden Curriculum in Music Education? : Japan-Korea comparison of School Music Culture

研究代表者

笹野 恵理子 (SASANO ERIKO)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：70260693

研究成果の概要(和文):

本研究の目的は、学校音楽カリキュラムを、実際に当事者である学校成員の視点から「経験された」レベルで解明することである。すなわち、学校音楽カリキュラムを、紙の上の真空の状態でなく、「生きた姿」で、「生きられた学校音楽カリキュラム」を解明しようとするものである。

本研究では、この課題を「潜在的カリキュラム」研究として構想し、「伝達されたカリキュラム」と「経験されたカリキュラム」の2つの視角から当事者のカリキュラム経験を解明しようとした。

研究成果の概要(英文):

The purpose of this study is to construct a framework for a theory of curriculum research in music education based on a "hidden curriculum". It is suggested that within the boundaries of curriculum research in music education, there has been a failure to recognize the need to research what this author sees as a "hidden curriculum". This study proposes that the concept of a "hidden curriculum" is a new perspective on curriculum experience in curriculum research and school music studies. This study will try to define what is believed to be a "living" or "lived curriculum", inside the present school music curriculum, from the perspective of "curriculum experience".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	600,000	150,000	750,000
総計	2,600,000	750,000	3,350,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：学校音楽 潜在的カリキュラム カリキュラム経験 音楽科教育

1. 研究開始当初の背景

(1)70年代以降、カリキュラム研究において、カリキュラムを単に領域概念としてでなく、関係概念として捉えようとする動きがでてきた(Erickson, F. & Shultz, J., 1992)。す

なわち、カリキュラムは、単一の枠組みからではみえない、多様な立場の成員間の関係性の中で成り立っている。

本研究は、これを複線的に記述することで、

学校音楽カリキュラムを多層的、立体的に把握しようとする試みである。言い換えれば、紙の上のカリキュラムが実際に実施される時、それはどのような構造の下で、どのような力学が働いて、どのように当事者に経験されるのか、カリキュラムを「生きた姿」で解明する。

(2) 本研究が着目する鍵概念は、「潜在のカリキュラム」である。本研究は、潜在のカリキュラムが指摘した「教育意図と学習経験の乖離」に着目し、当事者が実際に学んでいる内容とその経験産出過程、言い換えれば「意味の再構成過程」に関心を払う。

潜在のカリキュラム概念の提起は、カリキュラム理論と実践の間に横たわる「現場」の矛盾や、その曖昧模糊とした教育現実に対する様々な人々の感覚など、単一的、単線的なカリキュラム研究観では見出せなかった多様な文脈をすくいだし、可視化する思想を提出した。

それが示唆するのは、カリキュラム研究において、ひとつには、当事者である教師や子どもの「経験」とそれを構築する文脈を研究の俎上にのせることの必要性であり、今ひとつは、カリキュラムを関係性の視点から多元的、複線的に把握することの重要性であったといえる。

(3) すなわち、カリキュラムの「実質」は、当事者の視点から具体的経験に肉迫しなければ、十分に解明されない。90年代以降、欧米を中心に、学習者の経験をぬきカリキュラムを語る研究の危険性が指摘されている (Erickson, F & Shultz, J. 1992,

Pollard, A. 1998 など)。

教科カリキュラムにおけるそれも実際の子ども「学び」の具体的経験を解明してこそ、その教科カリキュラムの効果や成否を明らかにでき、教科学習の意味も解明し得る。

(4) この課題は、学校音楽カリキュラムの「経験」研究、あるいは「効果」研究と言い換えてもよい。音楽科の「学習指導要領」の目標における「音楽を愛好する心情」や「感性」「豊かな情操」を鑑みれば、学校教育修業期間を超えて学習者の生涯にわたる長期的展望にたった視野から子どもの学びの経験が編み直される必要があり、そのカリキュラムの「効果」は当事者の視点から長期的展望の下に検証される必要がある。

しかしながら、音楽教育学研究において、これまで長期的展望にたつて、学校音楽カリキュラムが当事者にとってどのような経験を構成したのか、カリキュラムに埋め込まれた教育意図を子どもはどのように意味づけたのかを解明しようとした研究は現時点ではみあたらない。

2. 研究の目的

そこで以上から、本研究の目的は、学校音楽カリキュラムを、実際に学校成員の視点から「経験された」レベルで解明することである。すなわち、学校音楽カリキュラムを、紙の上の真空の状態でなく、「生きた姿」で、「生きられた学校音楽カリキュラム」を解明しようとしている。

そして、カリキュラムを「生きた姿」で把握する本研究の中心的な鍵概念は、潜在のカリキュラムである。本研究のより具体的な目的は、学校音楽における潜在のカリキュラムの生成メカニズムを実証的に解明し、学校音楽カリキュラム経験が生み出される社会的文化的構造と文脈を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究のより具体的な課題として以下の4点を設定する。

研究枠組の提出: 学校音楽カリキュラムの実態を当事者の視点から把握する研究視角

を提出する。すなわち、音楽教育における潜在的カリキュラムの生成過程とメカニズムを解明するための理論仮説を提出する。

伝達された学校音楽カリキュラムの解明：カリキュラムを展開する当事者である教師のカリキュラムの意味付与の解釈枠、意味を規定する文脈をインフォーマル・インタビューによる教師の「語り」から解明する。

経験された学校音楽カリキュラムの解明：それを受けて、学習者は、どのような意味付与を学校音楽カリキュラムに行っているのか、学習者側の意味付与を量的、質的分析を通して解明する。

日韓比較研究と新たな学校音楽カリキュラム理論の創出（＝「学校音楽文化理論」）：上記の課題についての日韓比較を通して、日本の学校音楽文化の特質を解明するとともに、学校音楽教育研究において学校音楽文化理論を構想する。

4. 研究成果

(1) 本研究では、教育課程を把握する枠組として、田中統治(1992)を参照し、「カリキュラムの組織過程」と、「カリキュラムへの適応過程」の2つの別個の視角から把握する枠組を構成してみた。教育過程は、教える側からみれば、それは教育知識を選択し、伝達し、評価するための一連の組織過程としてとらえられ、一方、学ぶ側からみれば、それは伝達される知識を何らかの形で受け止めるための適応過程である。「教育意図と学習経験の乖離」は、教育過程における教師と子どもパースペクティブの相違としてたちあらわれる。ゆえに、学習者がカリキュラムに埋め込まれた教育意図をどう意味づけ経験するのか、その「意味の再構成」過程に注目する必要がある。

(2) 上述の「伝達されたカリキュラム」において、教師の「語り」の分析をとおして、

教師が教科カリキュラムを組織・伝達する際の意味付与を規定する文脈を析出し、分析枠組を構想してみた。具体的に教師のカリキュラム経験を規定する文脈として、以下の4つの文脈を析出し、下図のような分析枠組を構想してみた。

カリキュラムに関する役割、カリキュラム・アイデンティティ、学習者との相互作用、教師の社会的関係性、の4つの文脈が教師の意味付与を規定する。(研究論文)
図の縦軸の分化には、「生徒との相互作用」が、横軸の分化には、「教師集団との相互作用」が力学的に作用すると考えられる。

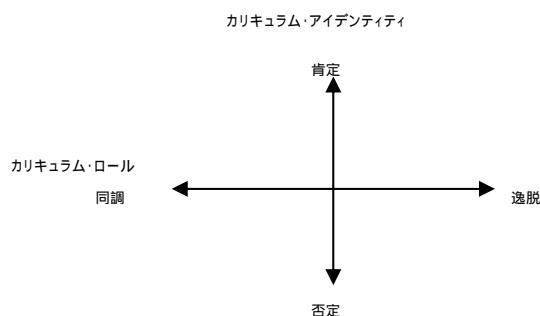


図 教師のカリキュラムへの意味付与を規定する文脈

(3) 学習者の学校音楽カリキュラム経験を解明していくため、はじめに質問紙調査から、学習者が学校の音楽授業をどのようにとらえているか、その内容の傾向的特徴を分析した。

実際の小学校5、6年生の児童を対象に、質問紙調査を行った(論文)。この調査は、音楽、図画工作、家庭、体育の実技を有する4教科について、教科授業をどのようにとらえているかを把握しようとして、K市内公立小学校8校の第5、6学年の児童2,704名を対象に実施したものである。(詳細は、論文)

回答結果に因子分析(主成分法、バリマッ

クス回転)を行った結果、音楽では7因子が抽出された(固有値1.0以上)。命名した因子は、「集団性表現」「音楽的情意」「授業ルール」「感心・意欲」「相互作用」「学び方」「自信・有能感」の7因子である。すなわち、この調査によれば、子どもたちは学校音楽授業において、これらの7カテゴリーのことをカリキュラム経験の内容として経験しているといえる。

これら音楽で抽出された因子を他の実技教科で析出された因子と比べてみると、

「集団的学習」にかかわる因子(集団性表現)が音楽のみに析出されたこと、音楽のみあらかじめ仮定した知識・技能項目が分散し、他に吸収されたこと、の2点が注目される。このことは、学校音楽では集団的な意味合いが学習者に強く認識されていること、

「音楽知識や音楽技能の獲得」が、まとまりをもった経験として学習者に構成されていないことを意味している。すなわち、学習者にとっての学校音楽における「表現」とは、個人のそれだけでなく集団の「表現」なのであり、子どもは音楽授業の中で何かが「できた」という実感や「できるようになった」という経験を意識的には保持していない。

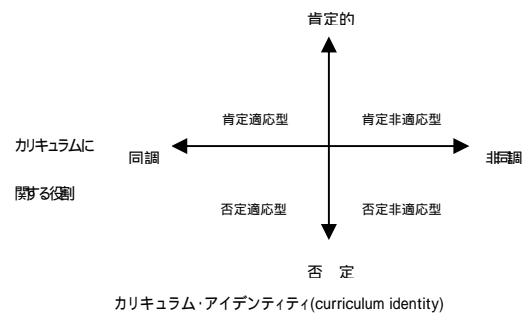
これらの因子と、学習者が「よい授業である」とみなす「総合評価」項目との関係について重回帰分析を行ってみると、「集団性表現」「音楽的情意」「授業ルール」という因子が「よい授業」の規定に特に強い影響がある。すなわち、「みんな一緒に」「楽しく」「決まりを守って」する授業が、子どもにとって「よい音楽授業」と認識されている。

(4)以上の析出された因子は学校音楽カリキュラム経験の具体的な内容とみなすことができるが、次にそのカリキュラム経験内容が、どのような力学や文脈から産み出され、意味付与がされるのか、そのカリキュラム経

験産出過程を質的な観点から分析してみた。

大学生を対象に「元」生徒の学校音楽の「語り」を分析し、下図のような類型と分析枠組を構想した。縦軸の「カリキュラム・アイデンティティ」には、「教師との相互作用」が、横軸の「カリキュラムに関する役割」には、「学習者間の相互作用」が経験の分化をうながすと考えられる。

図 学校音楽カリキュラム経験の分析枠組と類型



(5)日本における調査と同様の項目で、韓国において調査をし、日韓比較を試みた。その結果、日韓の学校音楽授業経験は、構造的にみれば大きな差異は認められなかった。韓国では、「きまりを守る」授業がよい授業であるとの認識が強い。また日本で析出された「集団性表現」をあらゆる因子は析出されず、日本では他に吸収された「技能」因子が、韓国においては析出された。

このことからみると、「集団性表現」因子の析出と、「技能」項目の非析出は、日本の学校音楽文化の特徴として指摘し得る。

(6)本研究目的で示した、生涯の学びの履歴の観点にたった学校音楽カリキュラム経験の意味の解明と、学校音楽文化理論の提出については、十分に展開することができなかった。今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

笹野恵理子「子どもは学校音楽をどう経験するか 潜在的カリキュラム研究の視点から」『音楽文化創造』60号 pp.34-37.(2010)

【査読無】

笹野恵理子「学校音楽教育における潜在的カリキュラム研究の可能性 カリキュラム経験研究の視点と教師のカリキュラム経験」日本音楽教育学会編『音楽教育学の未来：日本音楽教育学会設立40周年記念論文集』(音楽之友社 2009)【査読有】

Saburo KARIYA, Tkanobu MIYAMOTO, Eriko SASANO.et.al.「実技系教科と遊びの日韓比較研究」“*Korea Journal of the Japan Education*” vol.13-1 pp.1-18.(日韓教育学会編 2008 Korea)【査読有】

〔学会発表〕(計7件)

笹野恵理子「音楽教育研究において潜在的カリキュラム研究とは何か(6) 学校音楽文化の日韓比較」日本音楽教育学会第42回大会(埼玉大学 2010.9.31)

笹野恵理子・嶋田春奈「小学校教員養成課程における学生の音楽経験」第141回関西楽理研究会(於京都教育大学 2009.12.12)

笹野恵理子「音楽教育研究において潜在的カリキュラムとは何か(4) 当事者の学校音楽カリキュラム経験を問う」日本音楽教育学会第39回大会 (於国立音楽大 2009.11.9)

笹野恵理子「子どもは学校音楽をどう経験するか 学校音楽カリキュラムの再構築」日本教育方法学会第44回大会(於愛知教育大学 2009.10.13)

笹野恵理子「音楽教育研究において潜在的カリキュラム研究とは何か(5) カリキュラム経験研究」日本音楽教育学会第41回大会(広島大学 2009.10.4)

笹野恵理子「学校音楽教育における潜在的

カリキュラム研究の意義と可能性 教師のカリキュラム経験研究の視点」日本カリキュラム学会第19回大会(於神田外国語大学 2009.7.10)

笹野恵理子「学校音楽教育研究においてヒドゥン・カリキュラムとは何か 当事者のカリキュラム経験を問う視点」日本カリキュラム学会第19回大会 課題研究「ヒドゥンカリキュラム研究の位相(2) 教育実践への応用を切り口に」(2009.7.4 於鳴門教育大学)

〔図書〕(計1件)

中等音楽科教員養成研究会編『新編中等音楽科教育法』(音楽之友社 2009) 分担執筆部分 pp.22-24「音楽科の学習指導計画」

6. 研究組織

(1) 研究代表者

笹野 恵理子 (SASANO ERIKO)

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：70260693